

オーストラリア・ケアンズにおける海岸リゾートの発展

ケアンズ近郊パームコーブの事例

Tourism Development of Coastal Resorts in Cairns, Australia: A Case of Palm Cove

太田 慧*・矢ヶ崎 太洋**

Kei Ota

Taiyo Yagasaki

摘 要

本研究はオーストラリア・ケアンズにおける海岸リゾートの発展について、形態的变化をもとにその特徴をとらえたものがある。国際観光の主要な発地から地理的に隔絶されたケアンズは、1980年代の国際空港整備以降に急速な観光開発が進展した。ケアンズのビーチとその周辺は、リゾート開発の時期によってその様相が異なる。ケアンズ近郊のビーチであるパームコーブでは、1990年代から本格的なリゾート開発が始まり、その後海岸から北西方向の内陸に開発が進展した。2019年の調査では、パームコーブの海岸通りには観光客向けのさまざまな店舗が立地しているが、海岸通り沿いのホテルは高さが低く抑えられており、ケアンズ中心部とは異なる海岸リゾートを形成している。

I. はじめに

海岸リゾートの歴史は、近代ツーリズムの黎明期までさかのぼることができる。19世紀のイギリスの沿岸では、ロンドンやマンチェスターをはじめとした大都市の労働者の保養地としてブライトンやブラックプールなどの海岸リゾートが展開した。その後、19世紀末から20世紀初頭にかけて産業革命の進展とともに大陸ヨーロッパでも同様の海岸リゾートが発展した。これらの欧米の先進諸国における海岸リゾートでは、鉄道や船舶でアクセス可能な比較的大都市に近い海岸リゾートの発展がみられた。第2次世界大戦以前の日本においては、東京の労働者の保養地となった湘南や南房総や熱海、主に関西から船舶で観光客を受け入れた別府の発展がある。一方、国際観光の主要な発地である欧米の先進諸国から地理的に隔絶されたハワイやオーストラリアなどの周辺地域に位置する太平洋諸国では、海岸リゾートの発展は第2次世界大戦以降の休暇制度の確立や航空輸送の発達と大いに関連している。

こうした周辺地域の観光地は、海外からの投資や空港整備などの要因によって急速な発展を遂げる。小野塚(2011)は、サトウキビ栽培が主産業であったオーストラリアのケアンズが、国際空港整備後の1980年代以降に突如として国際的な観光地へ変貌した過程について、地元政府と日本企業への詳細な聞き取り調査から明らかにしている。これによれば、バブル時代の日本企業はケアンズの観光発展に大きく関与しており、その影響はリゾート開発のみならず港湾整備事業やウォーターフロント開発などの公的な施設整備にも及んでいたという。

地理学においては、形態的变化から島嶼地域などの海岸リゾートを対象としたリゾートの発展過程が議論されている。Pearce(1995)はリゾートの形態的变化をとらえることによってその発達過程を明確に理解し、将来の発達形態が予測できることを示唆し、リゾートの土地利用変化をとらえる必要性を強調している。また、リゾートの土地利用変化からその発展段階を示した研究もある。Young(1983)は地中海のマルタ島における漁村の観光地としての発達過程について、土地利用の経年変化をみることでマルタの漁業集落が伝統的な漁村の形態から観光地へと発達する6つのステー

*高崎経済大学地域政策学部
〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町 1300
e-mail kei_ota@tcue.ac.jp

**東京都立大学都市環境学部観光科学科
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 (9号館)
e-mail taiyo.yagasaki@gmail.com

ジモデルを示した。ここでは、複数の時代の土地利用を比較することで、マルタの漁業集落が観光地として段階的に発達してきたことをモデル化している。すなわち、初期の伝統的な段階、後期の伝統的段階、初期の観光の模索段階、初期の観光の介入段階、観光開発の拡大する段階、および激しい観光地化の段階である。オーストラリアにおける土地利用変化から海岸リゾートの発達過程を示したものは、Pigram (1977) によるゴールドコーストの土地利用変化を論じたものなどいくつかの研究がある。しかし、国際空港整備後に突如として国際的な観光地へ変貌したケアンズについては、海岸リゾートの土地利用を詳細にとらえ、その時間的・空間的な展開を論じたものはなく、急速な観光開発の事例として研究蓄積が求められよう。

そこで、本研究では、オーストラリアのケアンズにおける海岸リゾートを一つとりあげ、ケアンズ国際空港の開港した1980年代から2019年現在までの海岸リゾートの発展について、土地利用の変化をとらえるとともに、海岸リゾートにおけるビーチや施設の位置関係である空間構成の特徴を示すことを目的とする。なお、過去の土地利用の復元には、クイーンズランド州政府のオンライン空中写真閲覧システムであるQImageryを利用した。また、現代の土地利用図は主に2019年に実施した現地調査に基づくものである。本研究では、まず現在のケアンズにおける観光資源を整理し、それらの観光資源の特徴を示す。さらに、統計資料や文献をもとにケアンズの観光開発を整理し、空港拡張をはじめとしたケアンズの観光開発のインパクトを概観する。そのうえで、ケアンズ周辺の海岸リゾートの位置づけや、現地調査に基づく土地利用変化と空間構成の特徴を検討する。

II. ケアンズ国際空港の拡張と観光

広大な国土で移動距離が長大となるオーストラリアでは、航空輸送の発展は重要な課題であった。caimsairport.comによると、ケアンズ最初の空港は緊急時に飛行機が利用できるようにするために建設されたものであり、建設に向けた資金集めが開始された1934年から2年後の1936年に完成した。この空港は第2次世界大戦時にはオーストラリア空軍に利用された。第2次世界大戦後の1949年には大型の航空機に対応するために滑走路が1,730 mに延長された。さらに、1962～1967年にかけてジェット機が着陸できるように滑走路の長さが2,020 mに延長された。1982年には空港再開発のステージ I 工事が開始され、滑走路が2,600 m

に再び延長されるとともに、1984年には新しい国際・国内線ターミナルビルが正式に開業した。さらに、1990年には空港再開発のステージ II が完了し、メインの滑走路が2,600 mから3,196 mに延長された。こうして、ケアンズ国際空港は順次その規模を拡大させていった。

このような国際空港の拡張に対応するように、ケアンズを訪れた海外からの訪問者数も増加している。小野塚 (2013) によれば、国勢調査実施日における海外からの訪問者数は、1981年には902人、1986年には977人、1991年には4,044人、1996年には9,171人、2001年には11,063人、2006年には11,763人と1990年代以降急増している。

こうした国際空港の整備に加え、ケアンズが国際的な観光地へと急速な発展を遂げた背景にはケアンズの豊かな自然資源がある。ケアンズ観光の目玉は2つの世界自然遺産と海岸リゾートである。1981年に世界自然遺産に登録された「グレートバリアリーフ」は、総面積344,400 km²を超える世界最大のサンゴ礁である。総延長はクイーンズランド州沿岸の約2,000 kmに及んでいるが、ケアンズはその観光の拠点の一つとなっている。グリーン島をはじめとしたグレートバリアリーフの島々へはケアンズ中心部から多数のクルーズ船が運航されている。もう一つの世界遺産は、1988年に世界自然遺産登録された「クイーンズランドの湿潤熱帯地域」である。この熱帯雨林にはケアンズ中心部から発着する観光列車のほか、スカイウェイとよばれるロープウェイを利用すれば容易にアクセスすることが可能である。熱帯雨林の散策路はウッドデッキで整備されているため、観光客は特別な準備をすることなく熱帯雨林を散策することが可能になっている。ケアンズにはこれらの世界遺産を巡るツアーが多数あり、現地に滞在中にツアーの申し込みも可能でアクセスも容易である。

III. ケアンズ近郊とその特徴

ケアンズ中心部は海岸に面しているが、ケアンズ中心部の沿岸は遠浅の干潟であることに加えて、周辺に生息するワニが出現するために遊泳可能なビーチがない。ケアンズ中心部にはビーチの代替としてケアンズ・エスプラネードラグーンとよばれる人口のプールが設置されており、このプールと背後のホテル群はケアンズ中心部の代表的な景観の一つとなっている (図1)。これに対して、グリーン島やフランクリン諸島などのグレートバリアリーフのサンゴ礁の島では遊泳が可能であり、観光客はケアンズの沿岸からクルーズ



図1 ケアンズ中心部の人口プール（左）と干潟（右）
(2014年12月筆者撮影)

船でアクセスする。また、ケアンズ中心部から北西方面には、ビーチを核とする海岸リゾートが立地している。その一つであるポートダグラスはケアンズの北西約70 kmに位置し、ビーチの背後には高級ホテルチェーンやコンドミニアム、ゴルフ場が集積している。

ケアンズ周辺における遊泳可能なビーチはケアンズ中心部から北西約20 kmの海岸線沿いに点在している(図2)。なお、図2に示した地域区分の名称は、その地域に属するビーチの名称とも一部で一致している²⁾。ケアンズ国際空港に近いホロウェズビーチやマッカズビーチは住宅地となっており、これらの地域のビーチは観光客よりも主に地元住民に利用される日帰りのビーチとなっている。トリニティパークは2000年代半ばにマリーナと掘り込み式の運河を中心に大規模に開発された新興住宅地であり、トリニティパークの年齢の中央値は34歳と比較的若い(表1)。このほかにも、ケワラビーチやクリフトンビーチには、住宅とリゾートホテル、ゴルフ場などが混在した地域が海岸線沿いに展開している。

ケアンズ中心部から北西に約20 kmの位置には、パームコーブとよばれるポートダグラスよりも小規模な海岸リゾートが立地している。パームコーブ住民の年齢の中央値は49歳と周辺の地域やケアンズ全体と比較して最も高い。さらに、世帯当たりの平均子供数も0.4人となっており、ケアンズ全体の平均子供数の0.7人³⁾よりも低い。つまり、パームコーブは住宅地としては周辺よりも比較的年齢層が高い。このようなケアンズの沿岸における年齢や世帯構成は、ケアンズ沿岸の宅地やリゾートの開発時期との関係が示唆される。

2016年の統計調査では、パームコーブにおける雇用産業で最も割合が大きいものは宿泊業(12.3%, 109人)であり、次いでカフェ・レストラン(7.2%, 64人)と



図2 ケアンズ中心部とその近郊

なっている。以下、病院(5.1%, 45人)、高等教育機関(3.4%, 30人)、清掃サービス業(3.0%, 27人)が続くが、パームコーブの雇用産業の約2割を占める上位2業種は観光に関連する産業である。なお、ケアンズ全体の雇用産業では病院(5.8%, 3,864人)が最も多く、以下宿泊業(3.5%, 2,353人)、カフェ・レストラン(2.7%, 1,814人)となっており、リゾート地としてのパームコーブの特徴が示されている。以下では、土地利用を示しながらケアンズ近郊で比較的早い1990年代から開発が進んだ海岸リゾートであるパームコーブにおけるリゾート開発の展開を検討する。

表1 ケアンズにおける地域別の人口(2016年)

地域	人口(人)	年齢(中央値・歳)	世帯当たりの平均子供数
Palm Cove	2,059	49	0.4
Clifton Beach	3,146	43	0.6
Kewarra Beach	5,652	41	0.8
Trinity Beach	5,488	40	0.6
Trinity Park	3,105	34	0.8
Yorkeys Knob	2,759	44	0.4
Holloways Beach	2,347	43	0.5
Machans Beach	1,051	45	0.6
Aeroglen	403	41	0.7
Cairns North	5,191	35	0.3
Cairns City	2,737	42	0.2

(Australian Bureau of Statistics)

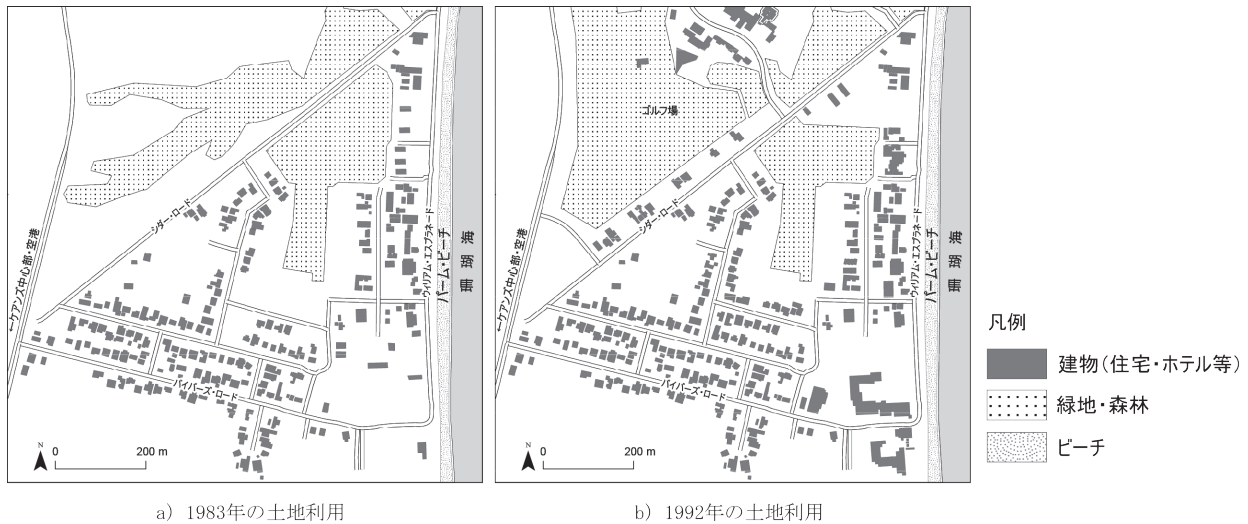


図3 パームコーブの土地利用 (1983年、1992年)

(空中写真閲覧システム QImagery により作成)

IV. パームコーブにおけるリゾート開発の展開

4.1 1982年、1992年、および2007年の土地利用

図3-aと図3-bは、空中写真をもとにパームコーブにおける1983年と1992年の土地利用を復元したものである。1980年代初頭までのパームコーブは、ケアンズの住民が日帰りで利用するビーチとその背後に広がる小さな集落であった。図3-aに示されているように、1983年のパームコーブにおける建物の分布はまばらであり、ビーチに面したウィリアム・エスプラネードとパームコーブの入り口となるバイパズ・ロード周辺に建物が分布しているのみであった。特に、シダー・ロードの周辺やその南側の地区でも空地が目立ち、シダー・ロードの北側は森林や農地が広がっていた。また、シダー・ロードの南側にも森林が広がっており、1983年の段階では多くの未開発用地が残されていたことが確認できる。

1983年と1992年間のケアンズの観光における主要なインパクトとしては、ケアンズ国際空港における1984年の新しい国際・国内線ターミナルビルの開業と1992年の滑走路の延長であった。さらに、1980年代後半には日本企業がケアンズの観光開発プロジェクトを多数手がけており、パームコーブにおいても日本企業によるリゾート開発が計画された。当時の計画は、遠浅の海岸から運河を複数のばし、船舶が入れるように遠浅の海を深く削り、その船舶の往来する経路に沿って護岸コンクリートを造る大規模なものとなっており、このような日本企業によるパームコーブの開発計画に対して地元住民と環境保護団体の反発があった(小野

塚, 2011)。こうした経緯から、図3-bのように1992年にはシダー・ロード北部にゴルフ場とリゾートホテルが建設されているものの、パームコーブの海岸の地形は保たれており、地元住民や環境保護団体の意向が反映されている。とはいえ、観光開発は着実に進展しており、パームコーブの北部に新しく道路が整備された。また、ビーチ沿いのウィリアム・エスプラネード南端には2019年現在も営業している大規模なリゾートホテルが立地している。

図4は2007年におけるパームコーブの土地利用である。図4に示したように、2007年になるとビーチ沿い

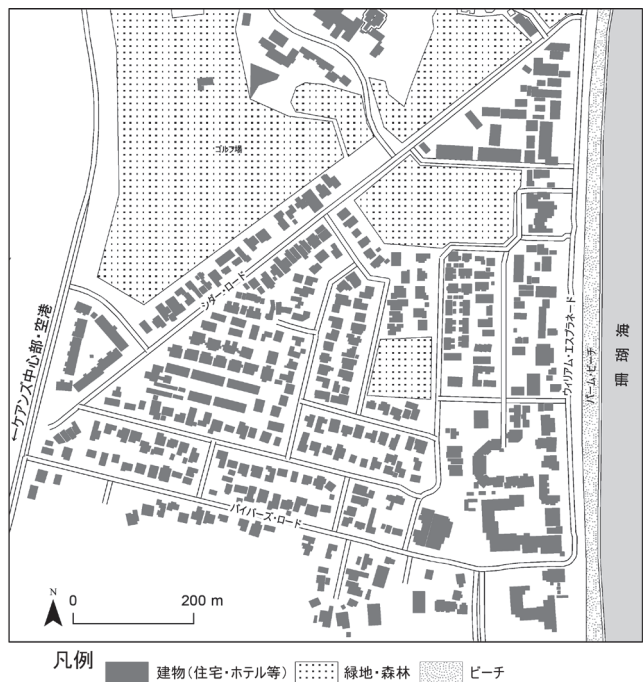


図4 パームコーブの土地利用 (2007年)

(空中写真閲覧システム QImagery により作成)



図5 パームコーブの土地利用 (2019年)

(現地調査により作成)

にホテルが進出していた。パーム・ビーチに面したホテルには敷地内にチャペルが併設されており、日本からのウェディングにも利用されるようになった。また、シダー・ロードの沿道にも大規模なホテルが進出している。さらに、シダー・ロードの周辺にも住宅地が広がっており、2007年にはシダー・ロード以南のパームコーブ全体の開発が進んだことが確認できる。以上のように、1990年代から2000年代にかけて、海岸通りから北西方向の内陸に開発が進展していったことが示されている。

4.2 2019年の土地利用

図5はパームコーブにおける2019年の土地利用である。2019年の土地利用は現地調査に基づいており、土地利用形態に加えて詳細な利用状況が確認できた。パーム・ビーチに面するウィリアム・エスプラネード沿道のホテルの1階にはレストランやカフェ、ブティックが入居しており、宿泊者以外でも利用可能となっていた。この海岸通りには旅行代理店も立地しており、グレートバリアリーフ沖合の島々や世界遺産の熱帯雨

林ツアーへの現地でのオプションツアーに対応する。また、海岸通り沿いには日用品を販売する小規模なスーパーマーケットやドラッグストア、ヘアサロン、ヨガスタジオもあり、一時的な滞在者だけでなく貸別荘利用者などの長期間の滞在者にも対応していた。また、海岸通りのウィリアム・エスプラネード沿道には高級



図6 パームコーブの海岸通りであるウィリアム・エスプラネードのヤシの木と背後のリゾートホテル

(2019年9月筆者撮影)



図7 オープンハウスの案内板と販売中の物件
(2019年9月筆者撮影)

な大型リゾートホテルが複数立地していた。しかし、パームコープのホテルは大型のものでもおおむね4階建て以下に高さが抑えられており、その高さはパーム・ビーチに立ち並ぶヤシの木よりも低い(図6)。このことは、ケアンズ中心部の海岸通りであるエスプラネード沿道に20階建て前後の高層ホテルが立ち並び、エスプラネード沿道の高層ホテル群がケアンズ市内で最も高いビル群を形成しているのとは対照的である。

Pearce (1995)によると、海岸リゾートでは海に面した海岸通り沿道の地価が最も高い。パームコープでは海岸リゾートにとって重要な海岸通りの景観への配慮により、高級リゾートとしての落ち着いた景観が形成されていた。

一方、海岸通りから離れた内陸をみると、住宅の間に一棟貸しの別荘が点在しており、長期の滞在者にも対応していた。また、シダー・ロードやバイバース・ロード沿道にも販売中の空き家が点在しており、オープンハウス⁴⁾の案内板を掲げた販売中の物件がパームコープの各地でみられた(図7)。バイバース・ロードの西端はケアンズ中心部や空港につながる幹線道路であるキャプテン・クック・ハイウェイに接続しており、バイバース・ロードの西端はパームコープへの入り口となっている。パームコープの入り口には住宅業者や不動産業者、旅行会社が立地しており、そこでパームコープの住宅や別荘が分譲されているのである。

以上のように、パームコープには海岸通りの超高層ホテルや大規模ショッピングモールなどの施設が立地しておらず、パームコープの海岸通りの土地利用は低層のホテルと小規模な商店の立地で特徴づけられる。さらに、パームコープはケアンズ中心部から地理的に隔離され、それによって高級リゾートとしての落ち着いた雰囲気を保っている。その一方で、2019年になる

とパームコープ北部のゴルフ場の街区にまで住宅地・別荘地宅開発が及んでおり、ゴルフ場とリゾートホテルのみであったパームコープ北部まで集落が拡大しつつある。

IV. おわりに

本研究では、ケアンズ近郊の沿岸の特徴と1980年代以降のパームコープにおける開発の形態の変化を観察することができた。これまでの海岸リゾートの研究は、物理的な特徴や土地利用パターンに焦点を当てており、海岸リゾートの社会文化的側面や開発プロセスが見逃されてきた(Agarwal, 2007)。本研究は文献調査や統計資料、複数年の土地利用の比較に基づいて、海岸リゾートの発展プロセスについて一定の示唆を得ることができた。1980年代のパームコープは、海岸通りやパームコープの南部に建物が分布していた。1990年代になると海岸通りに大規模なリゾートホテルが進出するようになり、2000年代には全体の開発が北西方向に進展した。2019年の現地調査では、海岸通りから離れた内陸に一棟貸しの別荘が点在しており、長期の滞在者にも対応していた。

ケアンズにおける沿岸は、ケアンズ中心部のように高度に観光化された海岸や、地元の住民向けのビーチ、大規模に開発されたマリナー、落ち着いた海岸リゾートであるパームコープなど、開発の時期や経緯によってその様相が異なることが示唆された。しかし、開発過程における政府や開発主体となるディベロッパーの関与、社会文化的側面などの詳細な発展要因については今後の研究課題である。

謝辞

本研究はJSPS科研費「周辺地域における海岸観光地の存立基盤と適正利用に関する比較研究(若手研究, 18K18275)」の一部を使用した。

注

- 1) 2011年の国勢調査から海外からの訪問者の統計はなくなっている(小野塚, 2013)。
- 2) オーストラリアの統計地域にはいくつかの種類があり、ケアンズ各地の境界にはSSC(State Suburb)の区分を利用した。
- 3) ケアンズ全体の統計データはUCL(Urban Centres and Localities)の区分を利用した。
- 4) オープンハウスとは、オーストラリアで行われている販売中の住宅見学会である。

参考文献

- 小野塚和人 2011. 観光地ケアンズの生成と日本企業：イメージ戦略をめぐる政治過程と地域社会変動. オーストラリア研究 24: 40-55.
- 小野塚和人 2013. 「観光による都市化」の考察の発展に向けて：ケアンズにおける産業再編による人口変動と住民の所得格差をめぐる動向. ソシオロギス 37: 154-169.
- Agarwal, S. and Shaw, G. 2007. *Managing Coastal Tourism Resorts: A Global Perspective*. Channel View Publications.
- Australian Bureau of Statistics. 2016.
- Pigram, J. J. 1977. Beach resort morphology, *Habitat International* 2(5-6): 525-541.
- Pearce, D. 1995. *Tourism Today -A geographical analysis-*, Longman Scientific & Technical.
- Young, B. 1983. Touristization of traditional Maltese fishing-farming villages: A general model. *Tourism Management* 4(1): 35-41.
- History, caimsairport.com; <https://www.caimsairport.com.au/corporate/about-us/history/> (アクセス日 2020.6.9)

